昭和二十四年五月十五日發行（毎月一回十五日發行）

慈光

第一卷　第二號

目次

一、唯佛の智見　故近角常觀先生述　2
二、信仰はそれ自身が目的である　山下成一……5
三、不可思議のことども　伊藤寅男……7
四、私の信に入るまでの經路　渡邊哲太郎……8

昭和二十四年五月號

故近角常觀先生御法話

唯佛の智見

昭和二年夏、會館に於て親しく拜聽せる御講話の筆録であります。今や十六年の昔となり、恩師なき今日、うたた感慨無量であります。御慈訓の一語一語、昏迷の私を照燭して、十方に光被するの懐があります。私が獨りするにしのびず公開いたします。もとより先生の御校閲を得ていません、文責は全部私にあります。

昭和十九年一月

山田太平謹識

今日の講題は「唯佛の智見」と致しましたが、詳しくは「唯佛與佛の智見」と申すのでありますが、私共こうして永らく信仰問題についてお話させて頂いているのであるが、その佛とはどういう御方であるか、その淨土とはどんな所であるかというと、「佛とは盡十方無碍光如來なり」、「佛土は是れ無量光明土なり」と眞佛土卷に仰せられている。吾々凡夫の彼れ是れ想像も及ばぬ不可稱、不可說の御境界が佛身佛土であると示されてある。

この境界は御智慧と御慈悲との滿ち充ちた境界であつて「慈悲深遠にして虛空の如し」とか「智慧円滿にして亘海の如し」とか申されてあるがこのことである。

吾々も常に御慈悲を語らせて貰うことであるが、いよ〳〵この人生を畢つてから、この佛境界、即ちお淨土に生まれさせて頂き、如來様と同様の身を證らさせていただくのであるが、その有様は到底凡夫の吾々では想像も何も出來ない。これを御和讃には、

安樂國土の莊嚴は、唯佛與佛の智見なり、究竟せること虛空にして、廣大にして邊際なし

と申されてある境界である。さてこの身は一体どんな風に生れ變らせて頂くのか、その姿はどうであるかというに、虛空の如く海の如き慈悲智慧の世界だというと、何だか廣大であつて、灰を大風の中にでも蒔いた如く、それでは形も何もない、つかみ所もないようであるが、しかし又、そうではないので、御和讃には、

顏容端正たぐいなし、精微妙軀非人天、虛無之身無極体、平等力を歸命せよ

とあるから、矢張り何とも言えない貌である。そう言う佛土に生まれさせて頂き、そういう佛にさせて頂くのであつて、そこは、

如來の智慧海は深廣にして涯しなし、能く二乘の測るところに非ず、唯佛のみ獨り明かにさとりたまへり

とあるように、聲聞、緣覺を初め等覺の彌勒菩薩さえも、佛の境界を窺い知ることの出來ない崖の下の人である。まして吾々凡夫の境界に居る者は言わずとも知れたことである。唯々吾々凡夫にとつて大切なことは、吾々その崖の下に苦しみ惱んでいるのを可哀相に

思召して下さる佛のお慈悲に氣づくことで、これが肝心要である。然しお慈悲というと聞きなれてしまつて、佛といえばお慈悲は當り前だから、お慈悲〳〵とばかり言わずに、往生極樂とか、どうしてくれる、こうしてくれるとかいう風に言つたらどうかと申されるかなれど、お慈悲というのは、そんな輕い意味では決してない。「どうでもよいけど、まあ飲んでいろ」というようなもんじゃあない。何時も申すことであるが、田舍などで、青年會か何かで、悪いことをした者がある時、「是々斯々のことをしたものであるから、除名處分にすべし、仲間はづすべし」という場合に、老人か又は極く親切な同情ある人が現われて、「そりやあ悪いことをしたのだから除名も仲間はずしも當然だが、そうしちやあ彼の前途が誠に氣の毒じやから、ここは一つそこを思つて許してやつてもらいたい」と、この助からぬ奴を助けてやろうというのが御慈悲というものです。こう言つて貰うた時、この青年の心としたらどうであるか？「こんな奴にそれ程に言つて呉れるか、有難い、すまない」と恐れ入る許りである。

吾々人生のすべての人々は、到底このままでは助からぬ、行き詰るより外に行くべき道はないのである。戒律が守れぬ、修業が出來ぬというといかにも宗教らしく、財政がどうの、經濟がどうの、人情の間違い、家庭の問題がどうのと言うと俗つぽくて、この世の問題というかも知れぬが、私はそんな事を區別せぬでもよいと思う。

吾々が行き詰るのはどこかと言うに、家庭問題であろうが、經濟問題であろうが、交際問題、人情問題であろうが、行き詰るのは、結局心が行き詰るのであつて、この行き詰りは人力の如何ともすることは出來ないのである。どうともして見ようがないのである。どれだけ思うて見ても、どうともすることが出來ないのである。

理想家は理想で行き詰つてしまい、道德家は道德で行き詰つてしまうのである。どうも財政經濟の問題が近頃のように行き詰つて來ると、眞に人生全く誰が、どんな勘考をしても行き詰つて人力ではどうすることも出來ぬのである。この人生、どうすることも出來ないこの行き詰りは、どうしたらよいか。否どうとも人力ではして見ようのないのが眞の行き詰りであつて人生萬事休すである。どうもこうもないのである、全くの行き詰りである。

私などもこの人情の問題に行き詰つたのである。初めは社會のため、宗教のためやるのであると、やれるだけやつて、刻々それが出來なくなつて、世をうらみ、人をうらみ、自分をうらんで、全く行き詰つてしまつたのである。この行き詰つた私がどうして救われたかというに、

「斯くの如く苦しみ惱んでいる私の心を理解して、同情の涙をもつて、憐れみを垂れ給う佛のお慈悲にあつて始めて救われたのである、安心させられたのであつた」

斯く言うと「吾々はそういうお慈悲であると思わにやならぬのですか、そう言うお慈悲をいただくのですか？」といわれるかなれどこう思わにやならぬ、こう信じにやならぬと、こちらで思い巡らす事が信仰ではない。こう言うて下さるのが佛のお慈悲であつて、これは事實である。自分を離れた客觀的な事實です。

そこへ行くと親鸞聖人の御信仰は、著しく客觀的で、而も具体的に堂々とお述べになつている。

法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在して、諸佛淨土の因、國土人天の善惡を睹見して、無上殊勝の願を超發せり。

と正信偈にあるように、全く客觀的に申し述べてあつて、自分のいただき心地など少しも述べていられないのです。ここは氣をつける

所でありましよう。この聖人が常の仰せに、

彌陀五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思し召し立ちける本願のかたじけなさよ。

かかる助からぬ奴を助けようと思召し立ちける御本願をお喜びになつたのである。次にまた聖人の信仰の告白に

親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙むりて信ずる外に別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土に生まるる種にてやはんべるらん。又地獄に落つべき業にてやはんべらん總じてもて存知せざるなり。

とあるが、御開山聖人の安心させられたは、いずれの行も及び難い、地獄一定の行き詰つた奴が、よき人の仰せ一つに安心させられたのである。即ちよき人法然聖人が、御自身四十三歳まで、あらゆる戒行を積んで苦しんで見たが、わしみたような愚か者は、皆駄目で行き詰つてしまつた。ただ斯る行き詰りより外にない、その者のために、彌陀佛は御本願をお建て下されたのだ。だからこの念佛一つで救われたのであるから、お前も早く念佛に助けられよ、早く念佛の筏に上れよと、手をとつて貰い、のせられて助けられたのである。

まあ、それからそれへとお話ししたくなつて來たのであるが、今私の念佛申しているのもその通りで、私も南無阿彌陀佛〳〵とお慈悲の水を飲んで安心させてもらうているのであるから、これを皆さんもいただいて安心されたらどうです。

あまり私がくだき過ぎて申すもんですから平易すぎて、何でもない水のように思召すかも知れぬが、決してただの砂糖の少しはいつた位の水と違つて、甘い極上等の水でありますから、お上り下さりや滿足せられるんです。

今朝も地方から來られた方がしきりに言われる。「どうも感激がないでいかぬ、こんな事ではいかぬ」と。私が申したのには「君それは芝居というもんだ。親はかく〳〵心配しているのであるから有難く思わにやいかぬと思うているようなもんで、變なものである。それは君の方で勝手に親心を想像しているのであつて親は喜びも安心もなされはせぬ。

親が折角言うて下さるからには、こちらも少しはどうかよくせにやと幾分でもこちらから出す積りでいる間は、まだ本當に親心が分つていないのである。

感激がないとか、少しはこうせにやすまぬとか言うているのは普通の考えから言えば至極立派なようであるが、親の方では決して安心も滿足もなさつてはいまい。

そんなら感激はなくてもよいかと言うに、なくてもよい處の騒ぎではない。それを氣の毒に思つていて下さるのである。

「念佛申し候へども踊躍歡喜の心疎かに候こと、またいそぎ淨土にまいりたき心の候はぬはいかにて候らん」との唯円坊の問いに對し、「よく〳〵案ずれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて往生はいよ〳〵一定と思い給うべきなり、喜ぶべき心を抑えて喜ばせざるは煩惱の所爲なり。然るに働かねて知し召して煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば、他力の悲願はかくの如きの吾等がためなりけりと知られて、いよ〳〵頼もしく覺ゆるなり」と聖人がお答え下されてある通り、實際佛の方が、吾々の煩惱具足した凡夫なることを、かねてしる し召してござるのである。感激の起らぬことを百も承知していて下さるのである。それだから、そのために、感激の起らぬ奴であるがために、ことにあわれみましますのである。

こう申すと、その地方から來た人は、又、

「そう言うて下さるからには、少しは感激もありそうなものに……」と仰言るかも知れぬが、

「何を言う、君にそんな甲斐性があるなら、何もあわれではない。その落ちるより道のない汝の心根が哀れであるから、この親は永劫見捨てぬのであるぞ!!」

と呼び給うのである。

信仰はそれ自身が目的である

山下成一

信仰はそれ自身が目的であり、凡愚の吾人が佛陀の大慈悲一つに融かされまいらせし心狀であつて、佛陀と吾人との外に何物の介在をも許さぬ世界である。いわば佛の御惠み唯一つに愚痴不足の吾々が大滿足を感じ、いうことなしにして頂きし天地である。然るに世には信仰を得て、これを手段として人生上の煩悩苦惱を逃れ、限りなき幸福を捉えんために信仰を求むる人がありますが、これは根本からの間違である。實際、人生の無常を感じ又は自己の罪惡を自覺し、此の世に何一つの光明も希望もなく、人生を思いきり見限るに至りし時に、始めて久遠劫來絶叫し給う如來大悲の招喚が聞こえ、ここに再び人生を見直し得て、その境遇に順應して、自ら生き甲斐ある生活を營むに至るのであるが、前者の如く信仰を手段として人生を安慰幸福に送らんとする如き、又は信仰を得て功利的に極樂往生を遂げんとするが如きは、實は人生又は自己に繋がれて佛力を信頼するに至らざるものなるが故に、從つて信仰上の幸慶を頂くことが出來ないのである。然し又世には人生の痛苦に急迫せられ自殺する人もあるが、斯くの如きは人生を捨て切つたように見えるけれども、ヨク〳〵吟味せば、實は人生を思い切り得ぬ執着心の爲に愚痴を起し、自暴自棄したに過ぎずして、人生を超越した意味からではなく、從つて信仰上から人生を思い切つたことは雲泥萬里の相違があるのである。實は信仰的に人生を思い切るということは、凡愚自力の計らいに非ずして、佛力のために、人生をそのまま超越させて頂くことである。心は如來の光明界に遊び、お惠みの天地に安んこんな具合で、吾々は、いつも自分を中心として、善いだ、惡いだとばかり言い合つていて、親の御恩は沙汰なくしているのである。吾々勝いきれぬ借金をこしらへ乍ら、ああこうと自分勝手ばかりしていて、親の御苦勞は何とも思うておらぬ。まことに人生、ああのこうのと言うているが、佛は大覺の境地にあつて種々善行方便して、迷える吾等を導びいてゐて下さつてお休みになる時はないのである。南無阿彌陀佛。

じ、此の世に即しつつ此の世を超越し得るので、その心境には孤かの行詰りもまた自暴自棄の影もないのである。

抑々信仰を手段として苦を除き、幸福に轉ぜんとするが如きは、恰かも片手で名譽成功を拜みつつ一方の手ではこの希望を充すべく如來を拜みつつ哀願している有樣で、心は右往左往に分裂して、一心に佛の足下に歸命する態度とは似ても似つかぬ相違で、實は我が希望を充たさんが爲に如來に阿諛し、又これを使役せんとする横暴至極な態度である。何という冒瀆であろうか。祖聖が「念佛はまことに淨土に生るるたねにてやはんべるらん、又地獄におつる業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり」とのたまいしは、聖人が念佛の効果を考慮する遑もなく、何れの業も及び難き身を深くざんげさせられて、「ただ念佛して彌陀に助けられまいらすべしときよ人の仰せをこうむりて信ずる外に別の仔細なきなり」と、只管如來の大悲を渴仰し、信順し給いし所以と拜察し得るのである。

かくて、唯、佛の御惠みのみに生きるという純一無雜の心情を「專修」又「專念」と申すのであつて、若し幸福とか、安心とか、極樂往生とか、僅かにでも功利的に豫期するところあらば、それは第二義に墮してる「雜修」の分を出ないのである。先ず信仰に入れば自然に苦惱も解決し、その幸福を現わし來るのでありますが、これは佛力自然の結果であり、その結果を先きに目を着け之を收めんとするは、恰かも未だ食せずして腹の充つるを望むと同樣である。然も衷心より佛前に額づき哀願懇訴しながらも、佛に對して敬虔の念薄く、然も何時までもその目的を達成せざることを焦心するばかりである。

慈母の膝に抱かれてる子供は唯、慈母の限りなき慈しみに充足滿足し大安心してるのであつて、慈母に對し何の要求をも殘していないのである。これをこそ第一義の信と申すべきである。子供の慈母の愛に人生を超越し自然に安からに轉じつつあるのであつて、安心してるという意識もなきまでに安心して居るのである。菓子や果物を與えらるべく慈母に哀求せんとする子供の心は已に第二義に墮してるのである。眞に信仰はそれ自身の外に目的はないのである。

白井先生の御講演に參りえて

奈良　田川光子

念佛のたふときみいのちまのあたりおろがむ今日の佳き日なりけり

みいのちにふかくしみたる念佛の御德はこころ和ましめたまふ

亡き御子を憶はす御師のおん沮三世の佛の悲心にかよふ

濁り世を救ふと出でしおん菩薩人のなやみをなやみましける

千歲の淨きみたまの寂けさを焰となしし世惡の形相

（法隆寺金堂炎上）

不可思議のことども

伊藤寅男

數年前の初夏の或る日曜日の朝、私は前日來の下痢の爲絕食の体を籐椅子にもたせながら新聞に目を通していた。ふとその一隅に山下成一先生の信仰談の催しのある記事に氣がついた。殆んど無意識的に椅子を離れてその會場たる和敬會館へと急いだ。定刻九時から正午迄三時間ぶつ通しで先生は實に力强い語調で信仰生活を說かれ、凡夫の罪惡の魂であること、煩惱の奴である點を自己の体驗から血涙と共に語られ、各自がこの點を自覺することによつて、この覺醒そのものが、み佛の慈光をあびたことである事を知らしめ給うた。ありがたい極みであり、只今迄の私にとつては思いもかけぬ驚異であり、不思議であつた。それのみならず、このような惡でも燒いても食えない奴を攝取して捨てたまわざる大きな御慈悲を知らしめ給うたことは、この世に考えも及ばない、又凡俗の思惟を超え拔き給う出來事であつたのでした。元々私は學生生活を終る頃、不自然な勉强の爲、身体の調子を破壞したのが緣となつて、遂には深刻な惱みに閉ざされ、ひいては飽く迄も自己の內心を看つめ鞭打ち、眞善美へかりたてやまない万物の靈長たるにふさわしい人間になりたい、ならずにおかないという念願に燃えていた。そしてその念願は必ず努力精進によつて達成され得るものと信じていた。所謂立身出世に尋き身をやつす同僚を冷然とながめ、理想的、高踏的な行き方考え方によつて自分の眞生命眞骨頂を發見し愈々それを助長發展完成しようとせずには居られなかつた。學業成つて一かどの社會人を期待していた父母兄姉の勸告心痛に耳を籍さばこそ、內心今に見ろ自分の信念の理解されて成る程そうだつたかと悅ばれる時は必ず來ると敢て言い譯もせず沈痛な思索靜思に精進しつづけた。爾來あらゆる名士の話に耳をかたむけ、書を讀み沈思する事十數年、喜悅に滿ち溢れたかと思えば忽ち暗黑の世界に突き落され變轉極りない姿に顚轉反側狂氣の如く悶えた事も一再ではなかつた。憶えば慄然たらざるを得ない。かかる支離滅裂不安定至極の私、而もかつての自信希望はどこへやらむしろ自棄的な氣持に占領されて居た私。殊に始末の惡いことには俗惡僞善と安易に妥協し胡魔化しの生活に腰を落着けようとして居た結果、表面は極めて平穩そうに見えて居ても內心の波浪極めて高い私にとつて前述の無意識的のかかる法難への列席は不可思議の出來事というより外はない。佛力の賜というも過言ではない。手におえぬ惡でも燒いても食えぬ私にこんな殊勝な發足が考えられる筈はない。不可思議と信ぜずには居られないと同時に不可思議力の絕妙さに低頭感謝を禁じ得ない。加之、先生が說き去り說き來り給うお話はそのまま私の苦悶の生活を代辯し給うのに外ならなかつた。而もこの哀れむべき私へ何という大きな御佛の御慈悲の御手がのべられて居た事だろう。同僚の立身出世主義をあわれむ身が實は內心人一倍その立身出世を夢見、羨望して居たのです。

のような矛盾撞着の主人公であればこそ、御佛は幾百億萬年の昔から懺の髓迄御見通し下され煩惱の鐵鎖に苦しみ四六時中に惡の奴たらざるを得ない私をあゝ哀れ助けずにはおかぬとあかず叫び續け給う御佛の絶對の御力を感得さして頂いたというは何という不可思議でしよう。御佛は善知識山下先生に身を現じ給いて地獄のどん底に呻吟する私に不可思議の世界を敎え給ちたのでした。

四十年を一轉機として御佛と共にあるの世界を知らしめられ果は張りきつた弓の樣な緊張の肉は和らぎ頭張り通しの全身はほぐれるという具合に全く別世界に住み得るに只々感泣するのみでした。依然として事に觸れ緣に會うては腹立・悲嘆・怨みごとの連續です。この醜い出來事・思いの中に御佛の御手引きは絶え間なく御働き下され、直ちに來たれの御呼聲に南無阿彌陀佛を稱名させて頂く幸者です。勿論いつまでたつても怪しい危い足取りの私ですが、もう大丈夫です。絶對ゆるぎない、飽くまで見捨て給わぬ如來の慈光に生かされる身の有難さ、勿体なさに感謝の念を蘇らせつつ第一刹を送らせて頂くのですから、そら危い!! と氣付かせていただく事その事が如來の御手廻しと悅ばせて貰えます。從來の私には夢にも及ばぬ事のみです。懺悔の私はもはや私であつて私ではない。爾來この大善知識の御示敎を御緣として近角先生はじめ花田・蟹川・澤田・能戸諸法兄と數多い方々の御手にすがらせて頂く身を本當に有難く思つて居る次第です。如來の大船に乘じさせて貰う氣持で一杯です。

南無阿彌陀佛

敗戰一週年を迎えて疎開先茅屋にて記す

合掌

私の信に入るまでの經路

渡邊哲太郎

終戰後私が復員したのは二十年九月初旬であつた。戰時中は軍需工場でも、軍隊でも、唯々「君の爲」「國の爲」をモットウとして働き、又自分こそ忠君愛國の士なりと自身を非常に立派なものに思い込め、それに何等の矛盾も感ぜず自己陶醉的な感激をもつて過ごして來た。

然し復員後は父母と共に農業に從事していたが、戰時中の感激も消え果ててなれぬ田畑の野良仕事が私には苦痛を增すばかりであつた。心が面白くなく仕事にも實が入らぬから家庭内においても色々なことで父母と意見が對立し毎日の樣に口論した事もあつた。

そんな譯で家を出て働くべく勤務先を探していたが、同年の暮れ頃Y町の某工場に勤める樣になつたが、私の胸に畫く美しい理想の世界は崩むべくもなかつた。來て見れば浮世なりけりここも亦を

り返すばかりであつた。

この中で唯一つ心の慰めを與えて呉れるものは、工業學校入學以來、軍工場、軍隊と不思議な緣で明け暮れを共にして働いた親友の谷川君一人であつた。常に親しく往き來して別に何を語るでもないが互にとけ合う樣に慰めとなり、色々と同君が勵まして呉れた。とは云え矢張り心の奥にはいつも語ることの出來ない淋しさと不滿とを訴える何ものか潜んでいて、何か他に刺戟を求めてやまぬものがあつた。

時に父の所藏の書物をあさり、又新たに買い求めて、トルストイの著書や、哲學の書、或は聖書や、佛書を讀んで見た。然しそれ等は私の心に何物も與えて呉れなかつた。勿論私の讀む態度も不眞面目なもので終りまで讀んだものは一冊もなかつた。

こんな狀態で昭和二十三年の春を迎えてからは文書に頼るよりも爲になる話を聞き或は語り合うことによつてこの解決が出來ないものかと考える樣になつたが、その機會もなく、よしんばあつたにしても仲々自分の心中を投げ出して語り得る自分の性分でもなかつた。

斯くて宗教的な集り、敎會とか寺院に行き度いと願つていた時も時、五月十四日村の青年會主催で山下成一先生の御講話を初めてお聞きした。

先生は「人生と信仰」と題されて、我々の氣付かぬ、人生の裏面の僞りと苦惱とに滿ちた相をとかれ、如來はそこから離れ得ぬ我々を憐み救わんとし給う大慈悲の方であるから、我々はこの佛に救われるより外に安心する道はない」と說かれて、最後に、其の救われる樣子を例えられて乃木將軍の話があつた。將軍が戎申の戰に最も大切な軍旗を失い、探す事も出來ず死を以てもお詫びも出來ず進退極まつた眞暗闇の行き詰りの時、明治天皇の御思召「軍旗を失つて苦悶している心中はよく承知している。旗を失う程によく戰つて呉れて嬉しく思う。旗の代りはあるが汝の代りはない。今後益側々いてくれよ」とのらせ給う。意外にも意外の有難い廣大な御思召に照らされ、それからは「天皇ありての乃木」となられ、一生を君の爲に捧げられたと云う話であつた。又佛敎は「あるべきようにあれ」という事を敎えるものである等、二時間餘りお話があり、其の間先生は始終微笑みをたたえられつつ而も力をこめてお話下された。

斯る話は今まで一度も聞いたことのないことであつたが、何か强い印象をうけた。

續いて榎戸の法通寺での第一回昭眞講座が開かれて、再び山下先生のお話をおききすることが出來た。御講話は前回と同じ樣なことであつたが、この同じ樣な話を聞く度毎に、味が深くならねばならぬ、話の筋を覺えてしまつて、もうそれでよいなどと思いが上つたことではいけないと注意して下された。

御講話が終つて座談會があつたが、一人の老人が何か先生にお尋ねして涙を流して居られるのを見て私は深い感銘をうけた。私は何か心をひかれて座談會が終つても私だけそこに殘り、人々が歸つてしまわれてから、やつとの事で口を開き「私はこう云うお話は始めて承わるのでありますが、お念佛は申せませんがどうしたらよろしいでしようか」とお尋ねした。それは全く何もわからず、少し聞いて見ようか位の氣持であり、又何を尋ねてよいかわからなかつたのであつた。

先生は「君が本當に將來この信仰の生活に入りたいと思うならば毎日僞りのない日記を書いて、現實の自分の姿をよく反省して見る事だ。恥かしい事だつたら後で破り捨ててもよいのだ。すると何ん

と馬鹿な事ばかり考え又しているのかと氣づく樣になる。然し未來の理想のことは美化されて見えるものだから現在のありのままのことを書いて見なさい。すると自分の愚惡さに氣づき、それと共に行き詰りが知らされ、自ら佛の救いが信ぜられる樣になる」と親切に教えて下さつた。又先生宅の法話會の例會も知らせて下さつた。

この日から先生に導びかれての日々が始まつた。休み〳〵乍らも日記をつける樣になつた。然し先生の云われた樣な破り捨てる程の事はとても書けない。私の心はそんなことを考えることすらしようとしないのだ。

只然し私の心に微かに殘つていた御教えは「他人の事を善し惡しと思う心そのものが問題である」と云う事であつた。いやなやつ、惡い奴と思う心はその相手に敵對する心であり、その他人の惡さを察知することが出來るのも自分自身に同じものを持つている證據である。それを自分の醜くさを省みずして他人ばかりに罪をきせて責めるものである。然しどんなに責めたところが自分の力で他人をチツともよくすることは出來ないのである。他人が自分に向つてどんな事を云い、又しようとも、それはそうあるより仕方がないので、私としては如何とも爲し得ないことで、それに對抗するのは結局自分が惡いことである。然し私の心の冷靜な時には一應それに從う樣な風に見えても、實際その場に臨むと決してその通りに實行出來ない自分である。無抵抗主義を通し得たらよいがそれが出來ぬのである。それはまことに困つた事である。

又福島政雄先生著「求信の一路」を求めてこれを熟讀し、著者の深い懺悔の情に驚き、然も信後の世界が如何にも朗らかな歡びに溢れる境地に到ることを知り、これを中心から渴望し乍らも、その意にまかせず、著者が感得せられている「直上に輝く佛の大慈悲心」が私にはすこしも感ぜられないので、その喜びを得たい〳〵とあせり、日毎にその世界を空想し、或は忽然と目前に現われぬものかと力んで見たりして、そのために夢の樣な陶醉的な一時の奇怪な喜びに到つたことも幾度かあつた。

六月中頃にはそんなことを繰り返していて全く自分そのものが分らなくなり、山下先生の御宅に伺つてその事を申し上げたが「その樣にあてにならぬお前だからこそ、どこ〳〵迄も見捨てぬという御慈悲ではないか」とお話し下さつたが、どうしても納得が出來なかつた。歸る時先生が、「法悅」という信仰の雜誌をお借し下さつたが、それにも亦信仰の歡喜と懺悔の言葉がいたるところに誌されていて驚ろくばかりであつた。翌日は先生からお手紙を頂き「君が訪ねて來たことは決して偶然ではない。佛の光明に照らされて來ずには居られなくなつたのだ。根本的に安心の頂かれる日の早からん事を樂んで待つている」と云う有難いお言葉であつたが、當時の私には何のことであるか先生の御意中を了解し得なかつた。

次に山下先生宅の法話會で知り合いになつた大野町の篤信家、竹内久三樣のお宅に八月頃から時々お邪魔する樣になつた。竹内樣は私に「信仰の話を聞いても決して世界が變つてしまうのでもなければ又行爲が改まるのでもない。何時までたつてもこの通りで、一錢のものは一錢に通用すればよいのだ」ということを聞かされて、私の非常な思い違いに氣付かせて頂くことが出來た。この樣なことは山下先生がよく私に「体裁を飾つている」と云われたが、全く澤山の人が居られる席ではどうしても恥づかしい心が先立つて、思う事をお尋ねせずに終つた事が多かつたので、その點を深く教えられた。

私は色々の教えを受けて月日を重ねるうち次のような事を獨りで

考えた。

信仰は自ら努め勵む事ではない。それかと云つて、あるがままの姿でいれば、煩惱そのものの私はどうなるのか、益々深く迷いに落ちこんで行くより仕方がない。それでは大變だ、何んとかならぬか。然し力なくして落ち行くもの自身にどうする事が出來ようか、石が水に沈むように防ぎようがない。先生方から、「斯る者をこそのお慈悲」とは承つているし、自分に自分で云い聞かせて見ても眞に慈悲を仰いでいない私にはそれは他人事の樣にしかお受け出來ない。此の頃の私はこんな事ばかり考えて自問自答を繰り返していて、どうどうめぐりばかりして居た。それとて大して苦しくもなく夜も寢られぬ事など遂一度もなかつた。自己の魂の一大事に當つてまことに不眞面目そのものである。

然し書物などによつて多くの方が入信前非常に苦しまれている事を知つていたので又もそれに執えられて、まだ〳〵反省が足りない寢られぬ程の反省がなくてはと思うのであつたが、かかる徹底した反省は到底出來ぬ私なのである。

九月初旬に法通寺の松本先生のお勸めで、全國宗教青年大會に出席させて戴き、比叡山で四日の合宿をし色々の講師方の話を聞きましたが、女性も參加していたので反つて煩惱の鬼の威力に惑わされ心の暗雲は如何とも爲し得ず、暗然として山下に暮れ行く湖水を眺めて長歎息するばかりであつた。

山下先生に導びかれる樣になつて最早半年近いのに、自分の心中を省みるとき何かしつかりしたものがあるか、一体ほんとうにお聞きしているのか、悲しい哉なんにもない。又身心におこる煩惱惡業は斷え間がなく盡きる所がない。こうなつてはもう手の出し樣がない。

十月になつてからは漸やく手に入れることの出來た近角先生の歎異鈔講義をただ讀むばかりで、もう餘り考える事もない位、捨て鉢になつたと云うか、これがあきらめと云うことか、又一面ぼんやりしてしまつた狀態が續いた。さて十月も十七日となり法通寺の昭眞講座が開かれ花田先生の法話を拜聽し、後の座談會の席で、先生が最初に私に、何か質問はないかとお尋ね下さつた。先生には既に二回お會いしていたので、殊に私に心をかけていて下さつたのであろう。そこで私は「今まで何度も山下先生にお話を承つていますが、心がキョロンとして、ぼんやりとしてわかりません」と申しましたが、内心では今日も先生がお話し下さつても、やつぱり分らずに歸らねばなるまいと泣くに泣けぬ氣持で、先生に又お話して貰うことが濟まない樣な氣持で居つた。然し先生が「そのぼんやりしていて、いくら聞いても分らぬのが、あなたの自性で、あなたはどうすることも出來ないのだ。そこをかねてより見てとり、必ず救わんとし給うのが彌陀佛の御本願である。それをあなたが受取ろうが取るまいが佛には問題でない。飽く迄もそのあなたにかかりはてて救い遂げずば止まぬ御本願です」と力をこめてお教え下さつた。その時俄かに不思議な涙がこみ上げて來て、我を忘れて泣き伏した。先生は合掌してお念佛しておられた。それは何故泣けたか分らなかつた程不思議な事實である。これを緣として佛の御眞實が遂に私の我慢の心に徹到した事を知つたのである。然し其の日はまことは夢心地であつたから本當に御慈悲にお遭いしたのである事も知らなかつた。

その翌日は實に穏やかになつていたが、何だか狐につままれている樣な氣持もした。その晩山下先生にお會いしてこの事を申し上げると、先生は「それでいいじゃないか、よかつた、よかつた」と殊に御喜び下されて、「渡邊君どうしたかなあ、然し佛樣が離れて下さらぬと思つていたが、それでもやつぱり氣掛りだつたよ」とおつしやつた。まことに私一人を御心配下さる佛の御眞實は、山下先生を始め、一切の御緣を通じて注がれている事に氣付かせて戴くのである。

善知識にあうことも、教うることもまたかたし、よくきくことも難ければ信ずることもなお難し

私は、この万劫遭い難き信樂にあわせて頂くことが出來たのである。今は佛の大慈悲の内に抱かれて、罪業の深きことも、煩惱の熾んなことも、一切をおまかせして、安心してあるがままの姿において、つとめさせて頂く事の出來た事を感謝するばかりである。

（昭和二十三年十一月記）

あとがき

第一號はまことに不備な點ばかりで申し譯がありませんでした。漸次改めたいと存じますが、お氣づきの點は御知らせ願います。

△「唯佛の智見」は山田太平氏が嘗て東京求道會館で近角常觀先生の御講話をそのまま筆録せられ、獨り味讀せられていたものを、名叶屋求道會のために印刷してお頒ち下さつたものでありますが、先生御往生の今日、先生の御肉聲に直ちに接し得られますことは何んと御禮を申してよいかわかりません。同氏の勞に厚く御禮申す次第であります。

△山下先生の「信仰それ自体が目的である」の御一文は、ともすれば浮わづつた信に墮し南利的、打算的に信仰をもてあそび、定散心に惑い易いことへの明快な御指示であり、他力信の至極であります。

聖人が御本典に稱名念佛すれども無明なおあり志願の滿足せざるは、爲物身たる如來を知らざるが故なりと述べているのも、他力の悲願を我が身一つに頂き得ざる者への歎きをお示し下されたのであります。

他力の悲願の徹到するところ破闇滿願の自然の德が建現し、山下先生のお言葉の「求心やむ時、是れ無事」の信界が開かれるのであります。

△「不可思議のことども」を執筆下さつた伊藤寅男氏は目下名古屋地方裁判所の判事の職に就かれ、信の上から正しい御判決の下されていることは誠に力强く有難く思つています公務御多忙中に御原稿を頂きました。

△ ▽

△ ▽

御告白にありますように永い求道の末に、美わしき信の華が開かれました尊い御体驗の實録であります。

△渡邊哲太郎氏の入信記は、嘗て工場に戰地に目ざましい働きをされて復員後生活の方向を失われた、現代青壯年者特有の苦悩をよくも信によつて解決されたことであります。同樣の御心境に居られる方々に大いなる光りとなりますようにと念願してやまぬ次第であります。

地上何處を掘り下げましても砂礫粘土等をへて地下水の清水に出遭うように、人生問題の一點を正しく深く見つめて參ります時、必ず信仰の地下水に到達するものであります。その中途に砂礫或は粘土に行き惑うて人生に絶望する方々もありましようが、その地下にコンコンとして盡きぬ信の清水あるを信じて求道を續けて頂き度いものであります

△ ▽

新執筆者の御住所

山田太平氏　愛知縣渥美郡泉村馬伏

伊藤寅男氏　春日井市和爾良下ノ段鳥居松住宅一〇三號

渡邊哲太郎氏　愛知縣知多郡鬼ヶ嵐村多屋

法話會變更御通知

毎月廿四日午前午後、市内昭和區北山町、教西寺、法話と座談、花田正夫

昭和廿四年五月一日　花田生

昭和二十四年五月十日印刷
昭和二十四年五月十五日發行
毎月一回十五日發行

定價　一部金拾五圓（郵稅共）
一年分金百八拾圓（郵稅共）

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二十九番地
編集兼發行人　花田あや

名古屋市千種區千種町馬走
印刷人　本伍郎

名古屋市千種區千種町馬走
印刷所　千草印刷所

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九
發行所　慈光社
振替口座番號　名古屋一〇四七〇番